「平和ではなく分裂を」　2023年08月04日

「私が来たのは、地上に火を投じるためである。その火がすでに燃えていたらと、どんなに願っていることか。しかし、私には受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、私はどんなに苦しむことだろう。あなたがたは、私が地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言っておくが、むしろ分裂だ。一家五人は、三人が二人と、二人が三人と対立して分かれることになる。父は子と、子は父と／母は娘と、娘は母と／しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと／対立して分かれる。」（ルカ12：49～53）

主イエスの「私が来たのは、地上に火を投じるためである」また「あなたがたは、私が地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言っておくが、むしろ分裂だ」という言葉を聞いて、少なからず奇異に思う。主イエスは人間の罪を赦し、神と共にある人生を切り開き、赦された者同士、互いを受け入れ合って生きる福音を示された。ここには、神との和解、人々との共生という喜びがある。それなのに、「火を投じる」とか「平和ではなく、分裂をもたらす」という言葉は共に生きる平和と矛盾するからである。しかし、これらの言葉には主イエスが生涯をかけた闘いが語られている。

主イエスは、人間を救おうとする神の御心、即ち、愛と真実を示された。それは、どんな人も神に愛され、生きることを是認された存在であることの証しであった。ところが、主イエスの時代は、モーセの十戒を基礎にして、律法と先祖の言い伝えによる膨大な律法体系に覆われていた。そして、これらの律法を守る人を「善」とし、守らない人、守れない人を「悪」と評価する社会を形成していた。残酷なことは、重い病に罹ると、神からの「罰」と言われ、「罪人」扱いをされ、ユダヤの共同体から排除された。律法による差別管理社会であったのである。主イエスの愛と真実は、社会から排除されて「罪人」と言われた人々を癒やし、社会に復帰させた。今日の言葉で言えば、人権の回復を言葉と業で現わされたのである。主イエスの言葉と業は、長年をかけて築き上げてきた社会体制を根底から突き崩すことであった。体制を維持してきた人々から、主イエスは危険人物として、命を狙われるようになった。主イエスは神の愛と真実を現わすことを「火を投じるために来た」、そして、「その火がすでに燃えていたらと、どんなに願っていることか」と言っておられる。「しかし、私には受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、私はどんなに苦しむことだろう。」人間を管理する律法から解放するために、洗礼を受ける、即ち、十字架の苦しみを受けなければならない。主イエスは、まやかしの平和ではなく、激しい分裂を生む。そこに、神と共に、互いを受容し合う福音の世界が来ると言われた。

そして、ミカ書7章6節の「息子は父を侮り、娘は母と、嫁はしゅうとめと対立する」という言葉から、「父は子と、子は父と／母は娘と、娘は母と／しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと／対立して分かれる」と家族間の対立を語られた。これらの言葉は、初代教会の事情を反映している。主イエスを信じたがために、理解されず、日常的に家族間の対立があった。著者ルカは、信仰を持つに際し、その覚悟を求めているのである。

今日、クリスチャンは争いを好まない温和な生き方をしたいと願っている。それは、信仰者として当然であるが、主イエスの示された愛と真実を現わすために、対立を恐れず、はっきりとものを言い、行動することが求められる場合もある。不義がまかり通る時代だけに、主イエスに倣い、「対立を恐れるな」の覚悟も必要である。